

## ブラジル長期留学帰国後報告書

武田 翔吾

2018年から2019年にかけて、ブラジルに約1年間、正確には10ヶ月間留学して参りました。その経験を自分の中でまとめ、またこれから留学を考える方々に多少の参考になればと思い、報告書を作成することにいたします。この報告書では、主に私がブラジルで得たと思うこと、『戦略的思考』と『他者への愛情』について、それと関連する経験を踏まえながら述べたいと思います。

その前にまずは、ブラジルでの私の生活と、そこで直面した問題点について書きます。ブラジルでは主にヘプブリカと呼ばれるシェアハウスに学生8~12名ほどで生活していました。その中で私は授業を受けたり、研究室の手伝いをしたり、また農業をする学生団体に所属したりして日々を過ごしました。そして長期や短期の休暇には、様々なご縁で繋がった農地へ実習にお世話になったり、観光地へ旅行に行ったりしていました。

ブラジルという未知の国で過ごす1年間では、数えきれない程のトラブルがありました。飛行機を間違えて空港に取り残されたり、台所に大量のウジが湧いていたり、家の鍵が壊れて屋根を這い上って自宅に侵入したりと、まさにいくらでもありました。その中で、今なお心に残っていて、自分の成長につながったと感じる問題点は、3つほどありました。『自己の不安定』、『テストの難しさ』、『異文化の理解』の3つです。

### ブラジルの経験について

私には、『自分の未来を切り開く』というブラジル留学の目標がありました。国際協力の世界で働くことが高校以来の夢であったのですが、大学生活の終わりが見えてきた頃、今の自分にはそのための能力が不足していると強く実感しました。そのためどうにかして自分の能力を向上させなければならない、と様々な選択肢を検討した結果、最も魅力に感じたものが熱帯の一流農業国であるブラジルへの長期留学でした。海外で一人暮らしするのも面白そうでしたし、ポルトガル語とブラジルの農業技術を両方学んできた人間は、国際協力の世界にもなかなかいないだろう、と考えたのです。

そんな目標を立てながら当初私は、アイデンティティを見失ってしまいました。勉強や農業関連の活動などの行動を起こす中で、自分はどんな人間なのか、何がしたいか、なぜ生きているのか、などといった根底の自己認識が、見えなくなってしまったのです。私は当時全く自分に自信が持てなくなり、何をするにも活力を失ってしまっていました。つまり自己が揺らいでしまったのです。なぜそんなに自己がくずれたのかといえば、それは新しい環境の孤独感、意思がないと何もできない空白の時間、自己表現を求められるコミュニケーションなどが関係していたと思います。ともかく、日本で既定路線の日常に守られていた私にとって大きな環境の変化が、自己理解の不十分さを浮き彫りにしたのです。大げさに思われるかもしれませんが、心の強くできていない私にとって、自己というものがこれほど曖昧で、また行動していくのに不可欠なものなのかと思知らされる経験でし

た。

この頃から私は、自己について考えざるを得なくなりました。自己というのはある意味では、この世で一番曖昧なものかもしれません。それを見つけ出して確立するというのは、非常に神経の削れる作業でした。そのような時、私は必ず散歩をするか、もしくは自分の思いをノートに書いていました。おそらく散歩をするときは幽霊のような顔だったと思います。私にとって自己を見つけ出すために効果があったことは、様々な体験をし、その感情の変化を記録すること、幼少期からの変化と、変化していない部分を振り返ること、自分自身とした約束を守ること、本や生身の人間の声にたくさん触れること、そして何よりお互いについて語り合える仲間を持つことでした。

そのような作業は、実は今でも続いています。私の考える自己の確立とは、『自分が何者かを知り、どんな環境でも堂々と自己の価値基準で判断し行動できる』状態のことをさしますが、留学を終えた今でも、そのような状態には到底達していないと思います。しかし、留学初期のようにアイデンティティを見失ったり自己嫌悪に陥ったりすることはなくなり、人生の目標も描けるようになりました。未熟ですが、当時に比べれば精神的な強靭さを手に入れつつあるように思います。

人間誰しも、一定の自己理解とその肯定感を持たなければ生きていけません。今回の経験はその自己を確立することの重要性を私に教えてくれました。それは決して日本にいたら見えなかったものだと思いますし、そのような作業は自分の情緒を安定させ、自己を確立して日々を力強く生きる助けになると思うのです。

続いて私が直面した問題点は、授業についていけず、テストの問題が解けないということでした。私は作物や土壌の3つほど授業を受けていたのですが、ポルトガル語で行われるということもあり最初は授業についていけませんでした。当然テストも難しく、作物学の授業で四回あるテストのうち最初の稲のテストは何と10点中2.2点でした。私は日本では熱帯作物学研究室に所属し、稲に関する卒業論文を書こうと考えておりました。そのような学生が、稲のテストでこの点数というのは話にならないと思いました。当時自分を見失っていたこともあり、大きく落ち込み涙まで流れたのを覚えています。それを受けて私は猛勉強し、2回目のテストでは8.7点を取り、最終的には平均8点で全教科合格することができました。

かといって、もちろんこの短期間に私の能力が4倍になったわけではありません。私実践したことは友人の助けを借りて授業で重要なポイントを教えてもらうことと、過去問を入手することでした。それらをもとに、今回の授業内容から出題範囲とその問題を予想しました。当然過去問が手に入らないこともあれば、友人の助けが得られないこともあります。しかし時間をかけて授業の内容に取り組みれば、高精度で出題範囲を予想することができるようになり、合格点は間違いなく取れるようになりました。日本にいた頃はヤマを張ることはしていませんでしたが、ブラジルで追い詰められたことによって「ターゲッ

トを絞った努力」を実践するようになりました。

それまでの私はサンパウロ大学で受けるポルトガル語の授業に非常に恐れを抱き、心の何処かで日本人だからできなくても仕方ない、とっていた節がありました。しかし最初のテストで落第点をとってからは、日本から来たことを言い訳にしたくないと思い高得点を取るために大きなエネルギーを注ぎました。そしてある程度納得できる点数をとったときに確信したことは、「正しい方向に」「十分な量の」努力をすれば難しいことでも実現できるということです。テストの点数など本質的にはなんの意味も持たないものですが、この時の経験と確信はその後の私のチャレンジに大きな勇気を与えてくれるものでした。きっとこれからもそうだろうと思います。

私がブラジルで経験した大きな問題点の最後は、異文化の理解です。私が日本で所属していた開発学科というのは多くの青年海外協力隊員を輩出していることもあり、異文化への接し方というものを一年生から習います。相手の文化を尊重しなければならない、自分から異文化に心を開かなければならないということは私も教わり、理解していたつもりでした。実際にブラジルでも、多くの人と関わった際に郷に従うことは忘れなかったつもりです。しかし、シェアハウスのメンバーのある一人とだけは打ち解けるのが難しかったです。彼は私より1ヶ月ほど後に参加した二年生で、彼の私への態度は他の友人と比べて高圧的なものでした。サンパウロ大学の農学部にはブラジルの中でも特異的な上下関係があり、先輩に対する礼儀の所作や後輩へのイジリが存在します。私は最初留学生ということもありそのヒエラルキーの外側にいたのですが、私に対する彼の態度はまさしくヒエラルキー的なものでした。夕食の残飯を食べさせられるなど、様々な場面で命令的に好まないことを強制された当時の私の胸には、彼の行動に対する不理解と不満が渦巻いていました。一度その件について彼と話し合いましたが、向こうは早口でこちらは拙いポルトガル語で、とても議論にはなりませんでした。気に入らないことに対して不満が言えないその時の悔しさは、いまでもはっきりと覚えています。しかし直接の議論ではなくメッセージアプリで話し合ったり（返答までに時間があるため、語学の差が出にくい）、他の友人から彼について色々聞いたりするうちに私たちの関係に変化が訪れました。まず彼からの高圧的な態度は緩まり、意思表示さえすれば嫌なことを強制されることはなくなりました。また私も彼について知るうちに、その行動をある程度理解できるようになりました。彼は前年まで、非常に上下関係の厳しいシェアハウスにいたのです。そこで受けた先輩からのイジリは相当なものだったようで、そのために勉強する時間を失い留年してしまい、家を変更するほどでした。それを知ると彼に対する私の不満は小さくなり、可愛いやつだとも思えるようになりました。

私は当時ブラジル生活に慣れつつも不安は残っていた時期でした。自分の立ち位置が不安定であった私にとって、周りと異なる態度にプライドが過敏に反応したのでしょう。その根源の感情はおそらく恐怖だったと思います。彼の行動は私を馬鹿にしているのか、

それとも打ち解けようとしてのものなのか理解できなかったことによる恐怖が、私にも強気の状態を取らせていたのだと思います。家を替えたばかりの彼と、ブラジル生活に不安定さを感じていた私とそのタイミングで会ったことが、何よりの不幸でした。

最終的にはお互いに相手を思いやる行動ができるようになり、彼との関係は最初に比べると信じられないほど良好になりました。かといって我々が大きく変わったかというところでもなく、単純にお互いの理解が深まったということでしょう。異文化の理解とは自分の感覚で相手を判断したり、ただ相手を受け入れたりするような一方的なものではなく、恐怖とプライドを抑えてまずは相手の理解に務め、そして互いに意思表示をし続けるということだと学んだ経験でした。

### ブラジルの経験を踏まえて

私はブラジルから帰って来て友人たちに会うと、留学前と変わったと言われることが多いです。ブラジルでは、すぐに全部を思い出せないほどの多くの経験をしました。それらの経験が体の中に積み重なり、私に留学前と比べて様々な変化を生じさせているのだと思います。それらの変化が今後生きていく上で有用なものなのか分かりませんが、少なくともその中で2つ、これからも大事にしていこうと思うものがあります。「戦略的思考」と、「他者への愛情」の2つです。

1つ目の戦略的思考に関しては、きっと自己を見失った経験とテストに苦しんだ経験が関係していると思います。目標を達成するために戦略的思考が重要だと学んだのです。

「戦略」と似た言葉に、「戦術」があります。どちらも計画や運用の意思決定のことですが、戦略とはより大きな大局的なもので、戦術とは小さな局所的なものです。例えば温泉旅行に行く時、目的地を草津温泉に決め、移動手段をレンタカーに決め、宿泊先を旅館に決定するのは戦略の分野です。その一方で、運転やお土産を買う際の意思決定、また雨や体調不良など予測していなかったトラブルへの対処は戦術の分野です。私は今までこの2つの違いをそれほど意識せず、どちらかといえば計画性より局所的な判断を重視して生きてきました。しかし、達成までに時間がかかり、現状では難しそうなる目標の場合、戦略が不可欠になります。戦略とはつまり、目標を簡潔に定め、自分の状況を正しく理解した上で「現状から何をすればその課題が解決できるか」という条件を定めることです。そして戦術とは、時間など利用可能なあらゆる資源を成功条件の達成に集中させることです。戦略の決定では、ゴールである目標が明確で、スタートである自分への理解が深ければそれだけ正確なルートが描きやすくなります。逆にこの2つが曖昧だと効果的でない努力をしてしまいやすくなります。一見当たり前のことで、私も似た話を日本で聞いたことはありました。しかし「自己理解」と「ターゲットを定めた努力」の重要性をブラジルで身にしみて痛感した私にとっては目が醒める思いで、未熟かつ遅ればせながらこの思考回路を実践することになりました。

目的の達成において戦略と戦術は両方重要ですが、物事によってその比率は変わりま

す。旅などは計画よりも現場の判断が重要かと思いますが、例えばテストや就活であれば、試験や面接が始まる時点でほとんど結果は決まっていると言えます。8：2ほどの比率で、戦略が重要な分野だと感じます。これらは私の経験に基づく個人的見解にすぎませんが、計画をおろそかにしがちだった私にとってこの戦略的思考は非常に重要に感じるものだったのです。これからも、大切にしていきたいと思います。

2つめの大きな変化としては、私の中に他人への愛情というべき感情が芽生えやすくなったことです。私はどちらかと言えば人見知りで、人と仲良くなるには時間がかかる人間でした。しかし留学以降、出会ったときに自分から心を開き、また相手の行動に対する許容の幅が広がったように感じています。これは、ブラジルの風土を1年間色濃く感じ続けてきたためだと思います。

ブラジルという国は、建国以来多くの民族を受け入れてきた移民大国です。そのため、特定の民族の儀礼や暗黙の了解というものが、少なくとも表立っては感じられません。道路標識も、社会のシステムも、非常に合理的に、誰にでもわかりやすく作られています。またブラジル人のコミュニティは、訪問者を歓迎します。内輪で固まらず、常に外部との接触を求め、それを楽しむような気質があります。例えば私は、ブラジル到着三日目に顔も知らない同級生から実家に招待されました。何もわからないまま行ってみると、そこでは父の日の家族パーティが行われていました。招待してくれた彼の家族や親戚は非常に親切にしてくれて、忘れられない思い出となりました。その際、見たことも無い日本人を家族パーティに招待して歓迎するブラジル人の懐の深さを感じたのです。そのような風土での生活が、私に1年間驚きと戸惑い、そして大事な出会いを与え続けました。

余談ですが、私は帰国後ヒッチハイクの一人旅を敢行しました。友人に勧められてのものです。きっとブラジルに行かなければ決してしなかつたろうと思います。他者との違いに好奇心旺盛な、人懐こいブラジルの気質が私の中に少しでも蓄積したのであれば、これからも大切にしていきたいと感じています。

最後に、ブラジル生活の感謝と今後の抱負を述べたいと思います。このブラジル留学期間ほど、今までの人生で人とのつながりの大切さを教えてくれたものはありませんでした。日本の家族や友人が出発を応援してくれ、またブラジル生活中も時折連絡をくれました。地球の反対側で生活していた私を、自分が帰る場所があるのだと実感できたことがどれほど安心させてくれたか、とても言葉では言い表せません。またブラジルで出会った人々はとても暖かく、新参者の僕をあらゆるコミュニティに迎えてくれました。顔も知らない関係で、メール1つで実習を受け入れてくださった方もたくさんおられました。本当にありがたいことで、もし私が逆の立場になった際は、このように訪問者を歓迎しようと決心するばかりです。

ただ私が、それらすべての人に誠実に対応できたわけではありません。特に寮の仲間とは、私が日本での就活を始めてからは話す時間を多く取れませんでした。その頃寮ではメ

ンバーも入れ替わり刺激的な時期だったのですが、後半はブラジル生活と日本の就活を両立できなかったのです。自分を受け入れてくれた友人たちと、後半多くの時間を過ごせなかったことは留学生活の中で最大の後悔です。

そのような不甲斐なさがありますが、やはり私はブラジルに留学して本当に良かったと思いますし、留学に関わった人すべてにできる限りの感謝を捧げたく思っております。

最後に余談ながら、私は来年から国際協力の末端の構成員として、jica という組織に勤めることになりました。自分の夢に対する険しい道の始まりであり、自分の未熟さを痛感する日々が長く続くと思います。しかしそのたびに、このブラジル留学で学んだように、人とのつながりとチャレンジを大切にしつつ、変わり続けながら前に進もうと思っております。